
ミーンシティ ~ 亡霊の街 ~

亀太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミーンシティ〜亡霊の街〜

【Nコード】

N3656A

【作者名】

亀太郎

【あらすじ】

近未来、国土を焼かれた日本人達は、難民として世界を彷徨った。彼等を受け入れる為に「日本人居住区」がアメリカ本土に作られたが、今やアナーキズムの街として、近隣の住民から恐れられる様になった。アメリカ人刑事、戦闘の鍛錬を積んだ調査官などが、己の答えを探すべく、今この街を流離う。

プロローグ

雲が暗く、渦巻ける河川のように流れていた。彼の眼に朱と青の濁流が見える。

彼は今、短い命を終え、死なんとしているのだ。永遠と思える苦痛と恐怖の段階を通過し、

肉体は今ゆっくりと物体に還ろうとしている。路上にて斃れた男。

埃っぽい通りにそって、老朽化したアパート、持ち主のいない、ひび割れ、雨と煤、

太陽と風に晒され、所々黒く変色した廃ビル、窓からゴミが捨てられ、野良犬が食えるものが無いかと飛びつく。

美しいといえる夕焼けの中、死んだのはベースボールキャップの黒人だ。首の金の鎖を

断ち切って、死因であろう傷口では、血液が赤く、次第に黒く、固まっている。そして傍ら

に人影ふたつ。

ひとりはデザイナーズブランドであろうか、長身に、黒に近い濃紺のスーツの襟元をく

ずしぎみに着ている。歳は若そうだが、濃いサングラスの為に良く分からない。

ひとりは異形とも言える。袴姿で、腰から二本差しといわれる、剣での武装をしている。

中世日本の戦士、サムライのスタイルだ。鬘は結っておらず、長髪、顔は整っているが、

無精髭が無頼の気性といったものを匂わせている。

サムライが口を開いた。

「銃も無いのでは、全く勝負に成らぬな」
スーツが答える。

「そう言うな、試し切り位にはなっただろう？いずれにせよ、このシヨバにこれ以上よそ者

を入れるつもりは無い。邪魔なガイジンは、皆殺しだ」

スーツの方が、死体の服の中をまさぐり、ビニールに入った樹脂を取り出した。

「一服するか？」

二人は樹脂をパイプに突っ込み、煙を肺の奥まで吸い込んだ。即席の安くさい、それでい

て重い気だるさが意識を変容させる。

「草か、くだらん」

紫煙を吐きながらサムライが言う。

「下らんものに振り回される、それが大概の奴の人生だ」
スーツも煙を吐いた。

「ニヒリズムか、その思想自体が下らないと思うが？」

甘い空気が漂い、思考は単純化してゆく。

「じゃあ、人の生きる動機は愛だとも言っつか、愛は……死ぬ」
話すのが面倒だ、と言う様な黒眼鏡のつぶやきだった。

「俺は武士だ、死など問題にしとらんよ。取るに足らん」

風が叫ぶ如く吹いている。乾いた街の埃の中、二人は消えた。どこへ？

見たものがあるか、さだかでなく、暴力の残滓のみ残して。

プロローグ（後書き）

この小説は、犯罪っぽい描写がでる可能性がありますが、クスリや暴力や性犯罪はやってはダメです。

第一話

スーパーマーケットの生鮮品売り場で、大男が岩の様な両手にバナナをぶら下げて、低く

唸り声を発している。二メートルは越えそうな体躯に、がっしりとした肩と首、

偶然通りかかった子供が、「お母さん、ゴリラだ!」と叫んで逃げ出した。

悲しげな表情で佇む男が、涙目でうめいた。

「なあ、フレッド、なんで買物してるだけの俺が、子供に逃げられなきゃいけないんだよ」

巨体に目をとられて、誰も気が付かなかったが、彼の連れが足元から現れた。

がに股の小男で、こちらにも異様にがっしりしている。スーツ姿に蟹みたいな顔をくしゃくしゃ

させて、笑って言った。

「ターザン街に現る、か。それとも類人猿? 絶叫する美女は何処だよ? キングコング!」

ぐすり・・・

「意地汚くバナナなんて見てるからだよ、リー。それもそんなに一生懸命」

「だって、俺、好きなんだよ、バナナ……」

「自分のキャラ考えろよ。最大限にひいきして見ても、キンメリアの蛮族の王者コナン、

てとこじゃないか。さっさとレジに持って行け、そのトロピカルフルーツを」

「バナナをなめるな……」

「はあ?」

「バナナをなめるな！」

「怒ってるのか？意味が解らんが」

「フレッド、お前はこれを、いや、バナナ様を作っているお百姓さんのことを考えた事があるか？その苦勞と、涙と、汗を。いいか、これはフィリピン、こ

れは台湾、これはブラジ

ル、どれも味も香りも栄養価も違う、世界中の英知と、労働の結晶だ！」

（バナナ様あ？とにかく逆らわん方がよさそうだ）

「すまん、リー。俺が悪かった、謝るよ。バナナは偉いよ、え」と・
・。栄養食で、

朝飯にも最高、黄色くてとても綺麗だ」

「少しは分かってくれたか、フレッド、だが黄色いだけがバナナじゃ無いぞ。お前のくちばし

もまだまだ黄色いな。お前になら、もっといろいろ教えてやってもいいぞ」

（このヤロー）

「ありがとう、その件について、また後でうかがうよ……」

その時、ピアノ曲、ベートーベン「エリーゼの為に」が鳴り響いた。フレッドの携帯端末である。

チャン、チャ　チャラチャチャチャン

「我等のボスからだ」

「ビギーか、こちらフレッドだ。殺人？日本人居住区？あそこじゃしよっちゅうだろ。

体面上だと？わかったよ……行くよ。刑事の名にかけてな」

第二話

ビル型駐車場にて、コンクリートの柱の間に、メルツエデスからフルード、ヒュンダイ、

ルノーにボルボ、あらゆる階層と文化圏の車がならんでいる。

「おい、リー、早く来いよ」

バナナを小脇に挟んだリーが運転席にもぐり込み、フレッドが助手席から手を伸ばして

車の屋根に赤色灯をくっ付けた。

セルを捻ると、二人の乗った白いポンコツのシトロエンの全身に、ゆっくりと油圧が行き渡り、

走行可能な状態へと、のそりと身を起こした。途端、サイレンもけたたましく、前輪をスピン

させながら駐車スペースから発進し、前方へとぶっ飛んだ。

街路樹とテラスの並ぶ小綺麗な街並みを、騒音と黒煙を撒き散らしながら、鯨みたいな形の年代物のハイドロ車が突っ切ってゆく。

「整備不良車の無謀運転だ、警察を呼べ！」

テラスでサンドウィッチを食べていた紳士が叫んだ。

「日本人居住区で殺人……ありふれて事件にならないよ！」

ハンドルを握りながら、ノイズに負けじとリーが叫んだ。

「住民の殆どはこういう捜査には非協力的、事実上の無法地帯だ！」とフレッド。

「書類入れの奥に突っ込まれるだけの事件調書に何の意味があるんだい？フレッド」

「スラムに生きて、死んだ……俺らに出来るのは、ただ記録してやる事だけだ」

「あそこの連中は、俺たちを嫌ってるよ」

「日本全土が、核の炎にさらされた。生き残った人々が難民として世界中に散らばった。

合衆国だけが、大量の日本人受け入れにOKをだした。ただ一握り、成功して栄える物も

いるが、多くは定められた居住区で、貧困のままに暮らしている」

「あまり感謝されてない、てわけねこの国は」

車はやがて新市街地を抜け、使い古されたビルと、バラックとテナトの並ぶ薄汚れ、悪臭漂う街にたどり着いた。

建物の窓から、階段に腰掛けた若者から、洗濯している女から、いたる処から視線を感じる。

「着いたよ、居住区に」

リーは車のスピードを落とした。フレッドが呟いた。

「今夜のディナーはサシミだ」

第三話

現場にたどり着いてみると、すでに辺りには規制が敷かれ、二人の車は検問の簡易ゲート

をゆつくりとくぐり、二人と車のIDが照会された。

「この分だと、鑑識もご到着だろう。俺達の仕事はあまり残ってないな」

フレッドの推測。

「結構急いだんだけどね」

とリィ。

「まあいい、被害者を見せて貰おうぜ。・・・ええと、そこごめんよ…ガイ者を…ここらじゃ

ブツダって言うのかい？見せてもらうよ」

死体を覗き込んだ、フレッドの表情が、やや曇った。

「身元判明だ……」

「何と素早い」

「茶化すな。首絞めるぞ」

「すまん」

「知ってる顔だ」

「……」

「こいつは、ヒル・ロボスだ。何度か世話してやった、ケチな売人だ。こんな所に商売に来

たんだとしたら、馬鹿な奴だ。ハハハ…」

「つらいか」

「ハイスクールでは有能なバスケの選手だった。卒業後、俺はポリス・スクールに行き、ヒル

の事は、よくは分からなくなった。てっきりプロになるもんだと思ってた。俺が警官として

この街に戻って来たら、ヒルはチンピラになっていた。商売で捕まっ

て、手錠を掛けられる時、

何か悲しいような、それでも可笑しいような、愛想笑いみたいのを浮かべてた。俺はただ、黙ってた」

「そんな場面じゃ、誰だってお喋りにやならないさ」

「黙っていた・・・もしかしたら、話し合って、彼の人生を変えれたかもしれないのに、ただ

、黙って、微笑んで、いいオマワリを演じてた」

「お前のせいじゃ無いって、フレッド」

「俺は、学生時代、奴に嫉妬してた」

「誰でも罪をしょっているんだ。気にするな」

「俺は今までずいぶん死体を見て来た。綺麗なものあれば、ひどいのも、生きてる様なものも

あった。だが、こんなに気に喰わないのは初めてだ。俺は、こいつの犯人を、追っかけたい。

十字架など、犬に食わせろ」

第四話・ホワイト

漆黒垂れ込める中、月が蒼い程白くビル群の陰から覗き、明かりの乏しいこの街の夜を灯している。

崩れかけたような風体の、暖色の灯りのはいった薄暗いバーのカウンターで、女が座っている。黒いライダースーツの上半身を脱ぎ、白いＴシャツには”HEELE”とプリントしてある。うなじの辺りでカットした黒髪、白い肌に細身、夜を流したかの様な黒い眼が闇の中で光る。

「お客さん、パーティーに行きたいんですか？」

バーテンが女に聞いた。

「ここらでやってるパーティーって言われる物は、しったかめっちゃかな代物で、まともな人間は近寄ろうともしませんよ。危険だからよしなさい」

「何処でやってるの？」

「私も詳しくは知りません。場所もその都度変わる様ですし。」

「裏の人間が絡んでいるでしょう？」

「まあ、当然でしょう」

「ありがとう、飲み代は幾ら？」

そして女は外へでた。遙か彼方に月があつた。空を見上げ、彼女は暫し星を愛でた。

永遠に続くものが果たしてあるのか？と彼女は考えた。星は永遠か？宇宙は永遠か？

命は？死は？

思索の遊びに浸りながら、彼女はライダースーツのファスナーを閉じた。周りの空気が変わっているのに気が付いた。

そこらの影から、ジャージやら、スーツやら、雑多な格好の男たち

があらわれ、彼女の行く手

を阻むような位置に陣取った。

「お姉さん、カッコいいな、遊ばんか？」

ウィンドブレーカーを着た男が正面に立って言った。

「レディの誘い方としては最低ね・・・力ずくでもヤル気でしょう？」

「俺も鬼じゃない。大人しくしていれば、優しくするし、いいブツもやるぜ」

ヒュッとして彼女が息を吐くと同時に、眼の前の男がふっ飛んだ。

強烈な拳の一撃で、顎を砕かれたのだ。周りの男達に動揺が走る。

「お、女の癖に、”YAKUZA”なめんじゃねーぞ！」

つかみ掛かってきた男の膝を、一撃で折った。（一体いままで何本の足を折って来たやら、と彼女は思った）

「おもしれー、俺が相手してやる」

発達した上半身を露にした男が、ステップを踏みながら、左右のジヤブで牽制してくる。肩

から背中一面、東洋の神の彫り物でいっぱいだ。彼女の出してくるローキックをかわして、

踏み込んで素早いコンビネーションを打ち込んでくる。男のボディーブローで、彼女の体が

ガードごと浮き上がる。

「かはっ」

呼吸が乱れたタイミングを見計らって、男が渾身の右フックを頭部に見舞う。腕ごと潰す気だ。

「おお！」

呻いたのは男のほうだった。フックを打ち込んだ男の右腕の手首に、彼女の肘が思いつきりめり込んでいる。

ジャージの男が角材を振り下ろした。当たれば頭が弾けるような一撃だった。だが男の方が

斃れた。角材をへし折って、手刀が男の顎を砕いていた。

彼女が背後まで右足を上げ、何かを蹴った。鉄パイプを振り下ろした男である。

自分の持ってた鉄パイプを鼻っ面にぶつけられて、顔面血だらけになっている。

「お、覚えていやがれ、無事で済むと思うな！」

男達はばらばらと逃げ出した。

彼女は鼻血を出してうずくまっている男の顔をつかみ、言った。

「八代という男を知っているか？」

「し……知らない……うーん」

男は気を失った。

彼女は通りを彷徨い、まともな電話ボックスが無いかとさがした。角に料金入れが壊されているものの、何とか動きそうな電話を見つけて、硬貨をいれた。硬貨が下から戻ってくるのがなんだか妙だったが、機械自体は作動している。

「報告します。こちら連邦麻薬捜査局ナオミ・ホワイト。今日付けでジャパニーズ・シティに潜入しました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3656a/>

ミーンシティ～亡霊の街～

2010年10月10日01時59分発行